

## woman たらす



## 紅花染 (山形県)

鮮やかな赤の染料として古くから珍重されてきた紅花。江戸時代は山形が一大産地で、全国の出荷量の半分以上を賄ったといわれます。

当時、花摘みを担ったのは若い女性たち。半夏生を過ぎた早朝、とげが朝露にぬれて

## 花が生む無限の色彩

まだ柔らかいうちに摘むのですが、その白い指先には血がにじんでいたといいます。摘んだ花は赤い色素が出やすいよう発酵させ、丸い「紅餅」に加工してから北前船で遠く京都まで運ばれました。

明治に入ると化学染料に押されて紅花の生産は激減しますが、昭和40年代ぐらいから地元で紅花染の特産品化に向けた挑戦が始まります。今では織物の産地である米沢市を中心に、さまざまな商品が作られるようになりました。

現代の紅花染も最大の魅力は色。赤や黄色のイメージが強いのですが、実は他の染料と重ね染めしたりすることで無限の色を作り出せるのです。ピンクやオレンジ色はも

ちろん、青や緑、紫、グレーも。こうした色に染めてもそこはかたない赤みが感じられ、身にまとう人の周りを明るく見せます。

多彩な色作りが可能になると、職人たちの創意工夫もとどまることはありません。写真の着物と帯は、染色した真綿から手引きした糸で織り上げた紅花染の紬です。手引き糸の太い部分と細い部分では色の出方が違いますし、真綿の染め方や糸の組み合わせによって複雑な色合いになります。無地に見える着物も、光の当たり具合によって色が変わって見えます。

偶然の積み重ねによって、予期せぬ色彩が生まれる面白さ。自然の力と人の工夫によ



って生まれた着物です。

(田中陽子・「暮らしのクラフト ゆずりは」店主)

〈第4金曜日掲載〉

紅花染の真綿手引き紬の着物と帯(いずれも米沢市)